これの霊舎にお鎮まり下さいます、
本阪分教会初代会長明山丑之助大人の霊の前に

本阪分教会六代会長　明山慶一郎

謹んで申し上げます。

初代会長様が大勢の教え子の嘆き悲しみの中、お出直しされてから、早くも八十年あまりの歳月が流れました。

本日ここに、私共はじめ本阪の理に繋がる教え子達が思いを寄せて、本阪初代会長追慕八十年追慕躍進の集いを開催させて頂くこととなりました。本来ならば昨年の五月二十四日に開催予定でしたが、親神様のいかなる思惑か、世界中に感染拡大したコロナ禍の影響で、二回の延期を余儀なくされました。

初代会長様は、京都府船井郡東本梅村（ひがしほんうめむら）で、明治七年八月六日、東本初代会長中川与志様の弟として五才若くお生まれになりました。材木商として浪路（なみじ）遥かな台湾で番頭格として勤めておられましたが、明山家の法事の折り、姉上東本初代会長様より、親孝心に励む道を諭され、因縁の自覚、心の入れ替え、人たすけの道を懇々と語り明かされました。初代会長様は、たすけ心の逝（ほとばし）る姉上様の真実話によりたすけ一条の親神様の深い思召しが心の奥にしみこむ程に、姉上様を親にも勝るたすけの親と信じる心が湧きあがり、道の信仰者となり、人を救ける人と生まれ変る心を定められました。時に明治二十六年十九才の時のことでございます。かかる中に姉上様が明治三十年十一月嬰児（みどりご）を背に負い、東京で布教道中を、お通り

下さる事を知り、たすけの親に追い縋(すが)るように初代会長様も上京し東本集団所に参られましたが「ここの集団所は宿屋ではない」と一蹴され、将来人だすけの道を歩む者の邪魔になる人間思案と欲の心と高慢の心を取り去れ、と申されて、低い心になり切る為に、紙屑等(かみくずなど)の反古屋(ほごや)になるよう教えられ、路地裏の粗末な家を借りて住む事と、儲ける事を考えず、タダ同様に売るよう申し渡され、徳を積むことを第一として、一日、七日、十六日の御供と、日々の売り上げの御初穂(おはつほ)を御供するよう教えられました。初代会長様は、東本初代会長様から教え導かれるままに、この世の元を創められた親神様の道の理を極めつつ真剣な道を歩むなか、東本出張所に住込みを許されて、庶務係を拝命し、東本内部で起きる総ての不始末の責任と叱責を一身に受けられ、人々の仕込みの台となられました。かかる貴(とうと)いお導きに添い切って通る中に、明治四十一年十一月二十四日、三十五歳で、おさづけの理を拝戴されて、病み患(やわずら)う多くの人たちに救かって頂きたいと願う中に、小石川林町にて布教に専念するよう命ぜられ、心勇んで「にをいがけ」に奔走(ほんそう)しておられましたところ、不思議な御守護に人々の寄り集う所となり、明治四十三年十一月二日、本林宣教所の設立を許されて、担任を命ぜられました。奉告祭を終えると、「お前は此処の御用は終わったから、今度は朝鮮に行っておくれ」とのお言葉を頂かれ、釜山(ぷさん)に赴(おもむ)かれました。荒道を切り拓く会長様の道は、私たちには到底、想像も及ばない茨の道でありましたでしょう、遂に明治四十四年十月二十五日、草梁宣教所の設立を許され担任者を拝命されました。その三年六ヶ月、

苦渋・苦難の道すがらを通られて、容易ならぬ身上に侵(おか)されて、誰しもが見分け付かない程に痩せ衰(おとろ)えて帰国されました時、尊いおぢばにて、東本初代会長様より「これからは大阪で布教せよ」そして「西の東本を創れ」とのお言葉を頂き、大正四年三月より天王寺茶臼山にて、いよいよ大阪布教の第一歩が始まりました。東本初代会長様から頂戴するお言葉は、総(すべ)て苦労の種ではございますが、幾重の道も素直に通られ、遂に芽の出る旬を迎えましたのでしょうか、次から次へと、初代会長様のたすけ一条の熱き想いにより、急速に道が拓けて、大正五年九月二十八日本阪宣教所が設立され、初代会長に任(にん)ぜられました。思えばたすけの親とお慕い申し上げている東本初代会長様のお膝元を尋ねて、人の二倍三倍も及ばぬ程の厳しくも温かいお仕込みと御丹精を頂き、東に西へと親の思召しのまにまに理を立て切って教祖の「ひながた」をお通り下さった、尊い道すがらでございました。これが本阪分教会の創立の元一日であります。その日から百有余年の誠真実の道を申せばかぎりない事ではございますが、常に言葉にされた事は、「俺の甲斐性、俺の力等と己の名を売ることの無きよう」自らを戒(いましめ)ておられました。また人様に対してのたすけ話は、実に素晴らしいものでありましたが、その話の中に必ず「私は少しも値打ちのない者だがただ神様の御守護で今日までこうして通らせて頂いている」と申され、「話上手は要らない、唯(ただ)、誠真実で常に親を語れ」と、自分を語る事を慎(つつし)めと仰せになったと伺います。

かくて昭和九年一月二十五日、東本が中教会に昇格、続いて同じ年二月

四日、本阪も分教会に昇格して、永年の懸案であった、東本初代会長伝「夢の生涯」を世に著（あらわ）された事は、誰よりもご満足の事であったとお偲び申し上げております。姉上東本初代会長様の又とない尊い直々の御丹誠を心に治め、深く身に体して、御恩報じの実行を第一に、低い素直な人をたすける心、人を育てる心に、充（み）ち満（み）ちてお励み下さいました事、また、若き日に、材木商としての経験が、東本大教会神殿普請に無くてはならない道具衆として、長野県の木曽の険しい山中に籠（こも）られて、並々ならないご苦労を伏せ込まれました事も、多くの人達のよく知るところでございます。尊きご功績を遺されて、初代会長様は、昭和十五年三月三日、六十四歳にてお出直しされましたが、名称の理は末代とのお言葉通り、親神様・教祖の御守護のもと、東本大教会のご丹誠に護られて、曾祖母かく夫人が三代会長の任を三十年の長きに亘りお勤めくだされ、教勢を著（いちじる）しく進展せられました。祖父の朋長が四代会長として十五年の道を広く深くお勤めくだされ、近代的な教会運営組織とシステムを確立せられました。父・一郎は五代会長として二十八年お勤めくだされ、誰にでも足を踏み入れやすい、近代的な新しき神殿・教職舎・信者会館のふしんを成し遂げてくださいました。

未だ形に先行する心のふしんは成し遂げれておりませんが、本阪に繋がる教信者（おしえご）達の永年の想いを形にして下さり、その先は私たちがお与え頂いたたすけの道場に、溢れんばかりのおたすけ人が育って参りますよう修理丹精に心血を注いで参る決心でございます。

不肖議（ふしょうぎ）、六代会長の理に就かせて頂き、初代会長、曾祖父丑之助の名を汚すことなく、本阪分教会の名称の理を落とすことなきように、部内の教会長とも心をあわせて、信者の人達一人ひとりに寄り添い、悩みや思いを充分お聞きして、理を外す事のなきようにと、共々に邁進させて頂いております。

本日、「初代会長追慕八十年躍進の集い」を開催させて頂き、本阪初代会長様の道すがらに想いを致し、低い素直な心で、どんな中をも人間思案を捨てきり、理を立切ってお通り下された初代会長様の信仰姿勢を今一度想い返し、ともすれば世情に流され、一人よがりの勝手な道を通っていないか、教祖のひながたの道から遠ざかっていないか、親神様の天恩にお応えする道を歩んでいるだろうかと銘々の心に自問自答し、よふぼくとして決して忘れてならない「にをいがけ・おたすけ」に更なる拍車を駈けて、来年三月二十二日（火）に迎えます、「東本初代会長追慕百年決起の集い」に向けて、その後に迎える「教祖百四十年祭」に向けて、初代会長様始め、先人先生方が歩まれた教祖ひながたの道を　　部内教会長・よふぼく信者一丸となって邁進する決心でございます。

初代会長様のお道すがらをお慕いする理の子どもをご照覧下さり、今もこれからも変ることなくお見守り頂きますよう、一同と共に謹んでお願い申し上げます。